重源上人に関わる徳地の主な史跡

国指定文化財

県指定文化財

その他

市指定文化財

【発行】（一財）山口観光コンベンション協会徳地支部
〒747-0232　山口市徳地伊賀地492−1　☎080-2916-8878
E-mail tokudi2005@yahoo.co.jp　HP http://www.tokudi-kankou.jp/　（発行日:2018年3月）

目　次

目次・著者紹介　1
俊乗房重源の遺跡ＭＡＰ　2
（一）法光寺　3
（二）月輪寺の薬師堂　4
（三）岸見の石風呂　5
（四）佐波川関水と木津（奈良定屋敷跡）　6
（五）僧取淵と雨乞　7
（六）梶畑の袈裟岩堂　8
（七）三谷の秀蓮坊跡（寿福院）・奈良原　9
（八）西宗寺（西方寺・浄土寺）　10
（九）嶽の観音／木引谷　11
（十）三島神社・鯖の伝説　12
（十一）伝説の色いろ　13
（十二）中谷原の馬ノ足跡岩　14

著者紹介

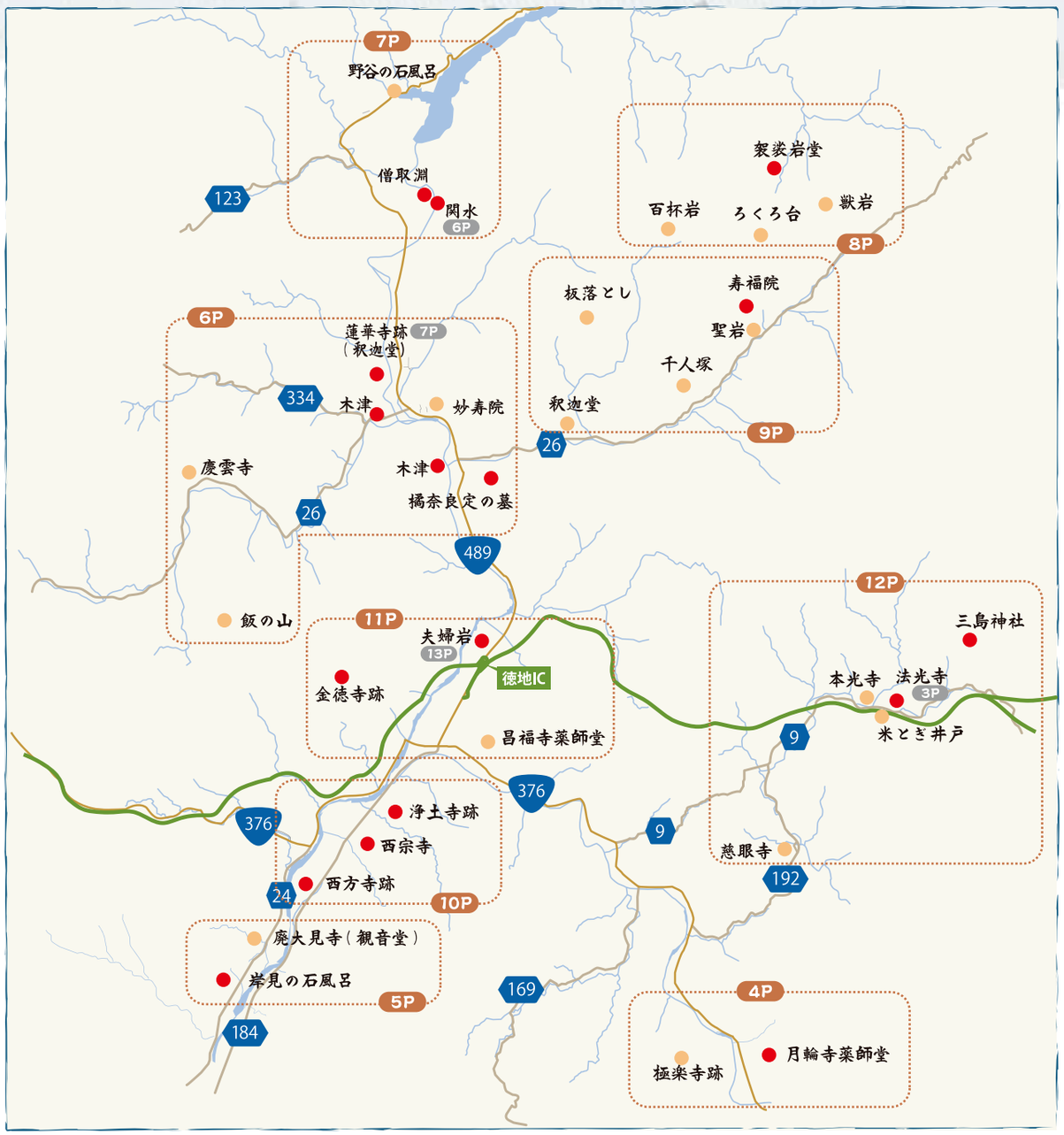
法光寺 東堂
松尾 宗茂（しゅうも）さん

私は昭和四十五年に法光寺住職として九州からきましたが、故郷は佐賀県の海辺の生活でしたから、山口の山寺で魚に縁が薄い精進生活を覚悟して来ました。お寺の住所が海の魚の鯖河内には少々疑問を抱いていましたが。着任した夜、引き継いだ書類の中の「安養寺縁起」を見て、東大寺再建に関わった由緒ある寺と知り、おおいに驚きました。重源上人の数多くの史跡や伝説の地を見て歩くにつれ、徳地の地から重源上人の足跡を消すと徳地の地図が消えてなくなるのでは、と心細くなりました。

徳地に重源上人が杣入りした史実は既に知られていたと思いますが、「安養寺縁起」を関係者に紹介してからが大変でした。阿弥陀堂に安置されていた阿弥陀如来坐像をはじめ、多くの仏像などに国宝級の価値があるだの、東大寺の仁王像と同年代の木材だの、耳を疑うようなことばかりでした。しかし、重源上人杣入り八百年記念事業の多くが終わった後、現在では随分と静かになってしまったのが残念です。

地名の鯖河内、とくに「鯖」の地名について、その後尋ねてみると、縁起に書かれた内容と同じ話でした。徳地の林業は重源上人によって始まり、徳地の文化は重源上人によって開かれ、徳地の観光は重源上人の足跡の紹介を抜きには成り立たないといっていいでしょう。

俊乗房重源の遺跡MAP



重源上人と徳地

一一八〇年に奈良の東大寺（註①）が、源平の争いの中で焼失。この再建事業を行ったのが俊乗房重源である。徳地は再建の為の杣（木材）の供給源となった。

東大寺再建は巨大なプロジェクトであり、技術流入、経済活動は徳地の産業構造を一変したと思われる。宋・都から大勢の人が去来し、仏の教にふれ、杣出しの作業に従事した。

徳地には今尚重源の名を冠した多くの遺跡が残っている。

（註①）国家の安寧と国民の幸福を願い、聖武天皇の詔により創建。七四三年

参考：山口観光コンベンション協会徳地支部
http://www.tokudi-kankou.jp/
2013/3

（一）法光寺

「重源の里みてある記」のペンをとるにあたり、先ずわが法光寺から案内します。

平成二年一月法光寺阿弥陀堂（上人堂）の本尊阿弥陀如来像と、東大寺南大門の国宝の金剛力士像の年輪成長パターンが、同じ徳地産の桧材で造られていることが奈良国立文化財研究所から発表され、テレビや新聞で全国的に報道されたのをきっかけに、「重源の里」のまちづくりが誕生しました。

法光寺は、文治二年（一一八六）四月に東大寺再興のため、用材採収の杣山として周防国があてられ、大勧進俊乗房重源上人が、杣事業の拠点として創建された寺で、蓮台山安養寺と号しました。

安養寺は、現在の字安養地全域を境内地とし、本堂には、重源上人が宋国の帝王から拝領されたと伝えられている、赤梅檀の大日如来像が秘仏として安置され、のちに薬師如来を前仏として祀られました。現在は本堂新築を期に曹洞宗の本尊、釈迦牟尼仏と高祖道元禅師・太祖瑩山禅師の尊像を安置しています。

重源上人は、自ら南無阿弥陀仏と号されたほど阿弥陀信仰をされた方で、当寺には、「南無阿弥陀仏俊乗上人」と記したお位牌があり、この地域を阿弥陀如来の安養浄土となすべく安養寺と名づけ、間口九間、奥行き七間の大伽藍を建立し、阿弥陀如来座像と観音菩薩と勢至菩薩を中心に不動明王と毘沙門天の五体の仏像を安置されました。この五体の仏像は山口県指定文化財です。

堂内の厨子には上人ご自作と伝えられる重源上人像が安置され、後ろの壁板には上人直筆の大梵字が残っています。現在は三間に二間のお堂に縮小していますが、柱や天井板、壁板、台座板などには当初の用材が残っています。

旧境内地には、塔頭の不動明王と毘沙門天の五体の仏像を安置されました。この五体の仏像は山口県指定文化財です。

堂内の厨子には上人ご自作と伝えられる重源上人像が安置され、後ろの壁板には上人直筆の大梵字が残っています。現在は三間に二間のお堂に縮小していますが、柱や天井板、壁板、台座板などには当初の用材が残っています。

旧境内地には、塔頭の七坊が点在し、三か所は今も当寺の飛び地で残っています。

平成四年には、「重源の里」づくりで、法光寺横に駐車場と公園が造られ、法光寺も「重源の里」の拠点としての大役を担っています。この年に「東大寺サミット」が山口県引き受けでありました。

法光寺阿弥陀如来坐像

「俊乗房重源」

重源上人は字名を俊乗房、俗名重定といい、保安二年（一一二一）、紀季重の子として京都に生まれる。京都醍醐寺に十三歳で出家し、養和元年（一一八一）、東大寺大勧進に補任されるまでの約五十年間は、醍醐寺を中心に国内や中国（宋）で活動していた。民衆を動員して、造営事業や各種宗教行事にも結縁する仏教的、社会的作善活動を行った聖である。

治承四年（一一八〇）、平重衡軍の放った火が東大寺・興福寺を焼き払った。その悲惨な有様が平家物語に記されている。翌養和元年、造東大寺大勧進に任じられたのは、重源六一歳の時である。さっそく、全国を行脚し資金・資財集めに取り掛かり、大仏の鋳造に着手した。文治元年（一一八五）、大仏開眼供養が催されたが、次に取り掛かったのは大仏殿その他の諸堂の建立である。文治二年（一一八六）、宋人の技術者らを伴って周防国に入り、巨木等の用材搬出のために徳地に杣入りした。幾多の障害を乗り越え、建仁三年（一二〇三）、長くかかった東大寺造営もようやく終わり、総供養が行われた。建永元年（一二〇六）、入滅。享年八六歳

（二）月輪寺の薬師堂

県下最古の木造建築物といわれている「月輪寺薬師堂」は、文治五年（一一八九）俊乗房重源上人が、時の太政大臣藤原兼実の協力を得て、旧串村清涼寺にあったものを、この地上村字蔵場に再建しました。

東大寺再興のため徳地の杣山に入り、まず安養寺を建立して用材採収の拠点となし、鯖河内の山奥に入り、中谷原から三谷へ、そして清涼寺へと巨木良材を探索するうちに、推古十七年（六〇九）に建立されたという清涼寺の荒廃した伽藍を発見され、そこにあった薬師如来や十二神将等を拝持して、月輪寺に移し一宇を建立し安置されたということです。

月輪寺薬師堂

薬師堂は、桁行五間、梁行四間、寄棟造りの茅葺で、カンナがなかった時代の建物で、素朴な簡素ではあるが、均整の取れた、鎌倉時代の質実剛健な気風がよくあらわれた、国の重要文化財であります。堂内には、中央に重要文化財の厨子があり、その中に秘仏の本尊薬師瑠璃光如来を安置しています。

薬師如来は、お釈迦さまの救済活動を具現した仏さまで、東方の浄瑠璃世界の教主です。十二の大願を起こし、人々の災難を救い福徳を与え、身と心の病を治すなど、利益を施し人間苦を救済されます。

須弥壇の左右には、持国天、増長天、広目天、多聞天の四天王が安置され、仏界の東西南北を守護し、仏法に帰依する人々を守護しています。四天王と並んで聖観音菩薩立像が安置され共に県指定文化財です。そのほか釈迦如来座像や薬師如来の眷属十二神将など多くの尊像が安置されています。

月輪寺の秘仏（薬師瑠璃光如来像）

月輪寺の寺号は、藤原兼実公を俗に「月の輪関白」と称していたことによります。

因みに、薬師堂の西にある西村の公民館は、重源上人が建立された極楽寺跡で、東の薬師堂と西の阿弥陀如来の極楽寺が相対して建立されていたもので、西村公民館には、阿弥陀如来が現在も安置されています。

西村公民館（極楽寺跡）

「月輪寺薬師堂」《上記参照》
国指定重要文化財。藤原兼実の建立。重源が清涼寺から移築したと伝えられる。
昭和三十二年の解体修理の際にその事が証明されている。仏像なども平安後期のものが多数。

「極楽寺跡」《上記参照》
重源が建立した四つの寺（西方、極楽、浄土、安養）の一つ。現在はその地に集会所が立ち、阿弥陀如来のみ残る。

上村周辺の遺跡

（三）岸見の石風呂

佐波川を南へと下り、防府市と境を接する岸見の西側の山裾に、茅葺の家があります。これが国指定重要民俗文化財の「岸見の石風呂」で、重源上人が東大寺再建の用材を搬出するにあたり、職人たちの疲労回復のために造られたもので、地元の人々により四季折々の農作業の合間に、石風呂を焚き伝承して今日に及んでいます。

古文書によると「山々木屋所へ往来の工匠寒疾に当てられ、これに悩むもの多ければ、上人諸人の苦悩見るに忍びず所々に温室を創してこれを救いたまうの一つなり。昔より幾星霜を経るといえども、開基の本願ここに朽ちず、入室するもの正月四日より晴雨をいわず諸所より来り、その数挙げて数えがたし、腰抜け足なえ疾癩諸病の療養として来る」とあります。

岸見の石風呂

石風呂内部の広さは、幅235㎝、奥行350㎝、高さ180㎝あり、野面石を組み上げ、天井には大石でふたをして石室を造り、正面に幅65㎝、高さ70㎝の焚口兼用の入口があります。

入浴方法は、内部で柴木を焚いて石室を熱し、残り火をかき出し、室内に濡れ藁を敷きその上に乾いた筵を置き、さらに現在は莫蓙を敷いて、着衣のままで心静かに入り、しばらく横たわって体を温めます。

岸見の石風呂では、毎年旧暦六月五日の重源上人の命日に「石風呂開山忌」を勤め、必ず石風呂を焚いてお祭りしています。ここも、「重源の里」の一拠点として、公園や駐車場も整備されました。

徳地には、石風呂だけでも三十三か所あり、現在も完備しているもの、半壊状態や消滅したものもありますが、柚野地区には、国指定史跡の野谷の石風呂など五か所、八坂地区は八か所、出雲地区には十二か所、島地地区は五か所、そして串地区が三か所と、徳地全域に散在しています。

なお、山口観光コンベンション協会徳地支部が「とくぢ石風呂まつり」を毎年三月に開催しています。この時は、岸見同様の歴史がある二の宮の石風呂や、重源の郷や国立山口徳地青少年自然の家に新たに作られた石風呂も参加して体験入浴ができます。その他、重源上人ゆかりの史跡巡りも楽しめます。

岸見周辺の遺跡

「岸見の石風呂」《上記参照》
国指定有形民俗文化財に指定されている。杣作業で寒疾を得るもの多く、重源上人が救い給う為に作られたと伝わる。今も石風呂は使われ続けている。

岸見の石風呂

「廃大見寺（観音堂）」
廃寺となった大見寺に重源作と伝わる観音、広目天、持国天の三像があった。現在は観音堂にある。

（四）佐波川関水と木津（奈良定屋敷跡）

徳地を縦断している佐波川は、徳地の北部に源を発し、柚野地区山間部の渓流を集めて大原湖となり、さらに南下して台山を深くけずり、裾野に広がる船路をうるおし川幅を広げて蛇行し、引谷川と三谷川を集めて下り、堀で島地川と合流して悠々と流れて防府市をうるおし瀬戸内海へ注いでいます。

佐波川関水

その佐波川の上流、台山の麓にある発電所の側に国指定史跡「佐波川関水」があります。

重源上人は徳地の杣山から切り出した用材を川の流れを利用して運びました。しかし、川底が浅く水量が足らないため、巨材は浮いて流れません。

そこで水かさを増すために、川をせき止めて、その片隅に巾三メートル、延長四十六メートルの水路を造り、両岸と川床には石を敷きつめて、川の流れの勢いを利用して材木を流したもので、これを「関水」といいます。

川底が浅く水量の少ないところには、こうした関水を次々とつないで海へと運ばれていったのです。東大寺造立供養記によると、木津から海に至るまで、百十八か所の関水を造ったとのことですから大変な工事だったでしょう。

木津は三谷川と佐波川との合流地点で、小字名を「きわず」といいます。木津は引谷川が佐波川に合流する川口にもあったといわれています。上流から運ばれた用材を木津に止め集めて、重源上人に伴って職人衆と共に徳地に下向した、山行事職頭領の橘奈良定が検査をして、東大寺の極印を押して奈良へと運ばれたのです。

橘奈良定は東大寺再建事業の後も、奈良には帰らずこの地に土着したので、八坂の乙女に奈良定屋敷跡があり、子孫は奈良定姓を名乗り、現在まで続いています。裏山には先祖の五輪塔など古いお墓があります。

橘奈良定の墓

なお、極印は、鉄製の焼印で印面は5.5㎝に3.3㎝で「東大寺」と彫ってあり、現在は防府市牟礼の阿弥陀寺に所蔵されています。

船路・八坂・引谷周辺の遺跡

「蓮華寺跡」《7P参照》
僧取淵で亡くなった蓮華坊を憐れんで、重源が蓮華寺を建立。今は蓮華寺跡に釈迦堂が残り、蓮華坊の像や釈迦如来像が安置されている。

「妙寿院」
天文年間（一五三二-五五）に大内氏の家老、陶興房が創建した。当初は大幻院と称され、境内の一角に陶興房の墓がある。興房は、大内館で吉見氏に殺害された弘護の子で、大内氏最後の当主義隆を自害に追い込んだ陶晴賢の父。県指定の文化財である三重宝塔版木があり、鎌倉時代のものとみられ、版木を用いて刷り上げられた「印仏」は、念仏の弘布や豊作記念などに用いられたと考えられている。墓地の西隣には石風呂がある。

「橘奈良定の墓」《上記参照》

「木津」《上記参照》

「慶雲寺」
弘法大師が九州遊歴の途中に結庵されて、地蔵菩薩を納められたのに始まるという。寺の西側の山中に半壊した石風呂が残っている。

「飯の山（いいのやま）」
白石山の麓の田の中に小さな小山がある。この山で重源上人が「飯の祭」を行われたという故事から名づけられたと伝えられる。

（五）僧取淵と雨乞

前回の国指定史跡「関水」の指定地域内の上流に、僧取淵があります。法光寺に伝わる『安養寺縁起』には「東大寺へ登す材木を筏に組み僧一人これに乗り鯖川に流れ船路の内河中に淵あり、材木僧共に沈み忽ち証跡見えず。今に淵底に僧の魂魄材木あり…」とあります。重源上人の弟子の蓮花坊が材木を筏に、その上に乗って下り、佐波川に野谷川が出合い、流れは勢いを増し淵まで来ると、正面に大きな岩盤がせり出し急に蛇行し、一瞬のかじ取りのミスで巨木の筏は巨岩に激突して、蓮花坊は筏もろとも淵の深みに飲み込まれました。

僧取淵

遭難の現場はその後、僧取淵、僧取岩と呼ばれ、今にその面影を残し語り継がれています。また淵に沈んだ材木は埋もれたままで、坊主木と呼んでいます。

安養寺縁起は次に、「後世干ばつの時雨乞の為に万民木棒を以て淵底の材木を動かせば雨は三日内に降ると。後人これを僧取淵と言う。」とあります。

私が昭和四十五年に法光寺に住して三年目の四十八年は、梅雨時に殆んど雨が降らず、夏中も晴天續きでダムも殆んど枯れた状態になり、八月三十日に「雨乞い」が実施されました。私は安養寺縁起にある雨乞いを観に勇んで行きました。

先ず下庄の蓮花寺跡から蓮花坊像を輿に載せ、鉦や太鼓を鳴らし行列を組んで僧取淵へ向かう。淵の水で沐浴した蓮花坊像を輿に納めて河原の祭壇に安置し、徳祥寺と宗圓寺の和尚さんと地域の人々が、般若心経を何回も何回も繰り返し読んでご祈祷し、一方では、坊主木にかずら綱をかけて近隣の老若男女がその綱を引く様は、東大寺再建の用材を奈良へ運び出す様子の再現の姿でした。そして、晴天續きの天候は次第に雲を呼び三日目の夕方から雨が降り出したのです。八百年来伝承された雨乞行事が、人々の切なる思いと、重源上人の神通力で実現したのでしょうか。

蓮花寺は、重源上人によって蓮花坊供養のため文治五年（一八九）に建立され、その後寛永元年（一六二四）蓮花寺を大原に移し源徳寺と改称。明治三年下野谷の吉祥寺と合併し翌四年徳祥寺と改める。昭和三十一年佐波川ダム建設のため、現在の下野谷に移転しました。

（六）梶畑の袈裟岩堂

袈裟岩様と呼ばれている不思議な石が御本尊として祀られている袈裟岩堂は、三谷の奥の梶畑の山中にあります。家もまばらな三軒しか住んでいない寂しい所ですが、峠にのびた林道の中ほどの、昼なお暗く生い茂る杉林の中に袈裟岩堂があり、五月と九月の五日にはお祭りがあり、大勢の人々がお参りしています。

重源上人が東大寺再建の用材を、周防の山から切り出すにあたり、当時は原生林であったであろう徳地の山々から、用材を探して伐採した巨木を、峠を越え谷を渡って搬出せねばなりません。ここ梶畑は、奥山からの用材搬出ルートの要所に当たる地点で、袈裟岩にまつわる伝説は、往時の巨木を山越えして運び出す難作業を彷彿とさせます。

法光寺に伝わる安養寺縁起には「…藤ヶ谷に大杉あり採用せられし谷底より峠へ曳上るに、大木なる故数百人曳けども少しも動かず、日斜めにして意いそがわしく上人団扇を以て斜日を招ければ日輪忽ち午に当たる。直ちに上人掛けし袈裟を取り路傍の石上に掛け置き、上人自ら手木を取り加持して以って彼の大木を動かしければ忽ち動き行くこと車の走るが如し。…」夕日を扇で招けば昼になった事。上人は疲れた数百人は休ませて、日が暮れて峠の轆轤組に準備をさせ、翌朝日が昇ると、重源上人は梃子の棒に加持祈祷して、袈裟を路傍の石上に置き、巨木を梃子で動かすのを合図に、轆轤組が巻き上げを始める、見る見るうちに巨木は峠に曳上げられました。

縁起は次に「直ちに峠に曳上げしばらく休息し上人持ちたる手木を後ろに捨てければ、彼の手木はるかに飛びて逆さに立ちて根をおろし枝を生じ頭は大なり、末細く枝こごとく逆さ枝の杉也。後人これを俊乗上人の手木の森と言い伝へり。上人路傍の石上に袈裟を掛け置きし故、後人これを加持畑俊乗上人の袈裟掛け岩という、今もって袈裟の形相厳然として存在せり。この岩に後人諸病諸願を祈念すればげんに霊験あり。また手木に加持し給う故に在名を加持畑と言う也。」とあります。

石風呂

袈裟岩堂

野谷・船路周辺の遺跡

野谷の石風呂

「野谷の石風呂」
国指定史跡。自然の大岩を利用して作った石風呂。

「僧取淵」《上記参照》
重源の弟子である蓮華坊が木材を川に流して運搬中に大岩に衝突して淵におち、落命したという。

「関水」《6P参照》
佐波川上流で伐採された杣は川の流れを利用して運ばれたが、巨木を運ぶには川の流れが不足した。その為、水を堰き止めて水深を稼ぎ、川床を滑らかにして流しやすくする関水を百十八か所つくったとある。

三谷周辺の遺跡

「袈裟岩堂」《上記参照》
杣作業中に大きくて動かなかった大木を重源が采配するとするすると登って行ったという。その時袈裟を脱いでかけた岩を袈裟岩様として祀っている。

「歌岩」
今は杉木立が繁りよく見えないが、里人の言い伝えでは重源上人がこの地で材木を引き出しの指図をしている際、近辺の山中から慈悲深い上人の徳を慕って歌たちが集まり、岩の上にその足跡が今も残っているという。

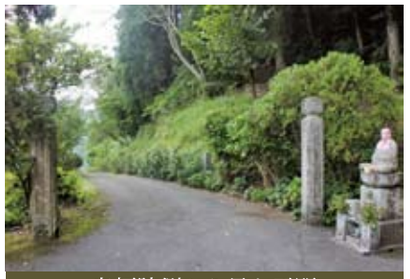
「ろくろ台」
一升垉は重源上人が梶畑から三谷へ木材を引き出したと言われ、奥谷には「ロクロゴウ」の地名、頂上にはロクロを据えた跡と伝わる今も平らな場所がある。

「百杯岩」
安養寺縁起によると、材木採取の折り、大石の上に職人等の飯椀を置いたような跡が残っており、後世、これを上人の百杯岩と呼んだという。

（七）三谷の秀蓮坊跡（寿福院）・奈良原

前回は梶畑の袈裟岩堂を案内しましたが、梶畑から真っ直ぐ南に延びた山道を登り一升垰を越えると奥谷の寿福院に出ます。この南北に伸びた山道は、滑や藤ケ谷方面の奥地で伐採した東大寺再建の用材を搬出するために開発されたであろう林道で、峠にロクロを仕掛けて巨木を巻き上げ三谷川に出す、主要な搬出ルートです。寿福院あたりはその三谷側の拠点となったところでしょう。ロクロ谷の地名が残っています。

寿福院は寺伝によると、俊乗房重源上人のお弟子秀蓮房源覚上人が、羽高の山に建立した秀蓮坊というお寺の古跡を、万治二年(一六五九)に現在地に移し、寺号を寿福院と改めたということです。その秀蓮坊跡は三谷川を挟んで寿福院の南側、羽高の山尾根の山腹にあり、今は地名となって残り、堂宇や境内の後は平坦で、池の跡がうかがえるだけとのことです。


寿福院側から見た正門

秀蓮坊の境内からは、北にロクロを仕掛けた一升峠から寿福院コースを、西側には奈良原を一望におさめ、用材運搬の様子を把握し、三谷一帯の杣事業を采配していたのでしょう。秀蓮坊跡には是非登ってみたいと、前々から思っていましたが、今の体調ではかなわぬ夢となりました。

奈良原のバス停のすぐそばの坂を少し上がると、右手に石ころを集めた上に千人塚の宝篋印塔があります。因みに法光寺にも杣事業の終わりに、事故で亡くなられた方がたを弔うための千人塚と米とぎ池がありま す。ここには千人塚の近くの民家の裏に、米とぎの池があります。供養の時、この池の水で米を研いだということです。

奈良原は、奈良から来た職人が滞在していたので、この地名がついたといいますが、職人衆の宿坊や飯場があった所でしょう。木地屋の地名も、木で食器などの生活用品を作る木地屋職人の工場があった所でしょう。

三谷をさらに下り、国木のバス停から奥に入る道を進むと、ずっと奥の山肌に木が生えていない部分が見えますが、北谷の板落としと言って、切り出した大木を山の上から滑り落とした場所で、今もって山の斜面に木が生えていません。

（八）西宗寺（西方寺・浄土寺）

重源上人は、徳地の杣山に入り東大寺再建の用材を切り出すかたわら、お寺を各地に建立されました。安養、極楽、西方、浄土寺の四か寺を建立されたことはよく知られていますが、明治維新の廃仏毀釈により、明治3～4年に多くの寺院が廃寺合併になり、安養寺に二か寺が廃寺合併して、廃寺から一字ずつ取って法光寺と改め、極楽寺は月輪寺に合併して廃寺になり、現在は西村公民館となり阿弥陀如来のみ安置されています。なお、東の薬師堂と西の阿弥陀如来の極楽寺が東西相向き合って建てられていました。

西方寺と浄土寺は、須路の宗徳寺、西大津の深光寺と共に廃寺合併し、明治四年に西宗寺と改め、沖の原の現在地に本堂庫裡を新築し、昭和五十六年に現在の伽藍を新築しています。

西方寺跡は、新田に墓地のみが残っていて、その南側の田圃が境内地であったとのことです。その一角にはお大師堂を兼ねた公民館があり、宅地の裏には遊阿弥陀仏と書いた大きな石碑があるなど、西方寺の痕跡をとどめています。

一方浄土寺跡は、林河内、志手原口の北側の山手にある墓地が境内跡で、西宗寺の世代墓もここにあります。浄土寺にあった阿弥陀堂は、西宗寺境内の下段に移されています。その阿弥陀堂には、阿弥陀如来坐像、聖観音菩薩、地蔵菩薩、毘沙門天など四体の仏像は昭和六十二年三月二十日に徳地町指定有形文化財となり、ほかに不動明王を加えた五体の仏像が堂内に安置されています。

堂前の案内板には、「これらの仏像は俊乗房重源上人創建による浄土寺(志手原口)阿弥陀堂に安置されていたが、明治四年本地に移されたものである。本尊阿弥陀如来坐像は像高127㎝桧材一木造りで内刳りを施し藤原末期の優れた作風を残している。他の三体も田舎風の素朴な感じをまぬかれないが、いずれも郷土の歴史を伝えるものとして貴重である。」と山口市教育委員会の説明があります。

西宗寺の阿弥陀如来は、法光寺の阿弥陀如来と一緒に三重県の東大寺サミットで津市博物館での重源上人特別展に出展され、一体が並べてあり、その大きさも彫刻の具合も殆んど一致して瓜二つのお姿にビックリしました。重源上人の時代に一緒に製作された仏像ではないでしょうか。

西宗寺の阿弥陀如来坐像

法光寺の阿弥陀如来坐像

三谷周辺の遺跡

「寿福院」《上記参照》
重源の弟子の秀蓮坊が建立。材木採用の為とある。移築前は山頂にあったという。

「聖岩」
東大寺再建のために各地を行脚した俊乗房重源上人は「勧進聖」と呼ばれた。里人は、この岩の前に建つと鎌倉時代の杣仕事が色々と想像されるという。聖岩の前には、道を挟んで愛のふじ橋があり、四月末～五月初めには訪れる人も多い。

「千人塚」
過酷な杣だしの作業で亡くなられた方を弔ったという。

「板落とし」
一升峠(※)から尾根を伝った山上から大木を落とした跡。
大小の石の床よりなる急坂が北谷川の淵までつながっている。
板落としという名称は製材した板を落としたとは考えにくいので、韋駄天落としのなまったものではないかといわれている。

「釈迦堂」
聖徳太子由来の清涼寺が荒廃しており、文治五年(一一八九)、その再建として月輪寺が建設された折りに数多くの物体を各地に移された。その一つが釈迦堂と伝えられる。

※一升峠
梶畑側で伐採した木を三谷側に移動する際の尾根ポイント。ここに轆轤を立てたという説あり。

伊賀地周辺の遺跡

「西宗寺」《上記参照》
重源が建立した四つの寺(西方、極楽、浄土、安養)の一つ西方寺を起源としているが、西宗寺として移転。
阿弥陀堂には廃浄土寺にあった重源作と伝わる阿弥陀如来などの像がある。山桜の巨木も有名。

西宗寺阿弥陀堂と山桜

「西方寺跡」《上記参照》
新田上公民館の位置に寺があった。墓や石碑が残る。遊阿弥陀仏塔、国司元武(毛利隆元に仕え、輝元のお守役)、元蔵(輝元家老)の宝篋印塔など。

「浄土寺跡」《上記参照》
(現西宗寺阿弥陀堂)
広目天立像、持国天立像がある。

（九）嶽（だけ）の観音／木引谷（きびきだに）

【嶽の観音】

法華寺の山門

通称「庄方観音」と呼ばれているこのお寺は、真言宗に属し狗留孫山（くるそんざん）法華寺と申し、本尊は聖観音菩薩です。この寺は、昔は狗留孫山の山頂近くにあったものを宝暦二年（一七五二）観音堂を奥の院・嶽の観音と称して残し、本堂は現在地に移されました。

当初は玉藁山金徳寺と称し、白鳳時代に天武天皇が国家の安泰、国民の幸福を願い、国々に勅願所を建立され、狗留孫山山頂近くに伽藍を建て、十一面観音菩薩を本尊に安置されました。それから数百年後に、源平の合戦で東大寺は焼失したので、俊乗房重源上人が再建の大勧進に任命され、文治二年（一一八六）に用材採集のため徳地の杣山に入られた折り、狗留孫山の金徳寺が荒廃しているのを嘆かれ、直ちに堂宇を再建され、お弟子の恵浄房を留めて霊佛十一面観音菩薩に、東大寺再建の成就と職人たちの安全を祈願させたということで、重源上人が中興開山という縁起が伝わっています。

この頂上に至る道筋には一丁ごとに、丁塚地蔵や三十三番観音像が刻まれた自然石が並び、奥の院の周りには、中興開山の碑、賽の河原、穴観音他霊石奇岩が多く見られます。

【木引谷】

重源上人は東大寺再建の用材採収のために先ず安養寺を建立し、ここを拠点に杣山に入り、巨木の用材を切り出すため、山を開き谷を埋めて林道をつける難工事を重ねて、用材を搬出しました。串方面の山から切り出した用材は、木引谷を土引きして下して、山畑から島地川に流し、佐波川の本流に運ばれたのでしょう。木引谷の名は、山道を自転車で下ればブレーキをかけ過ぎてキーキーいうのでキーキー谷かと思えば、八百年前から大木を土引きしたのを「木引谷」それを（キーキーだに）と呼んだのでしょう。

木引谷の道

かつて萩城への山代街道が、萩から山口へ城が移されてからは、鹿野から串へ木引谷を通り漆尾から引谷を通り山口に至る「新山代街道」となり、現在に至っても、木引谷は、徳地から鹿野を通り須万に至る県道9号徳地徳山線として生かされている道路です。これらは八百年昔の国家的大事業の歴史を物語るもので、徳地の林業にとっては、重源上人こそ徳地林業を興した元祖と称すべきお方でしょう。

小古祖・堀（こそ・ほり）周辺の遺跡

「金徳寺跡（法華寺観音堂）」
重源は当山の山からも杣出しを行い、中興開山として碑が残っている。

「昌福寺薬師堂」
東大寺の末寺として天平宝字（七五七～七六四）に福生寺として創建されたとの寺伝を持つ。境内にある薬師堂には平安後期の様式の薬師如来、二天王の像がある。また石風呂も残る。

「夫婦岩」《13P参照》
小古祖地区に伝わる伝説。東大寺用材の貯木場で見張り番をしていた夫婦が、佐波川の増水で亡くなり、村人が小屋跡に陰陽の石を並べて供養したと伝えられている。

（十）三島神社・鯖（さば）の伝説

奈良東大寺再建大勧進俊乗房重源上人は用材を求めて周防に下り、用材採用の拠点として安養寺を建立しましたが、最初に取り掛かったのがすぐ北側の鯖の山です。三島神社は造林の鎮守神として、伊豆国賀茂郡三島大明神から勧請（かんじょう）し、この鯖地区の現在地に、用材採用事業の成就と職人たちの安全祈願のために建立されたお宮です。

三島神社の鳥居と狛犬

安養寺縁起の後半には、杣事業にまつわる色々な伝承が記されています。その一番目が鯖の伝説です。

「東大寺建立材木採用ノ為上人並ニ武田番匠其外諸職人等ヲ召連レ深山ニ行キ所々ニ木屋ヲ築キ毎日材木採用セラレシ数日経テ職人等戯レニ曰ク我等故郷ヲ出シヨリ以来山中ノ事ナレバ魚肉ヲ食セズト云ヘバ上人是ヲ聞召シ直ニ杣柧（そまかど）ニ鯖ト字ヲ書キ加持シテ池中ニ投ズレバ忽チ鯖ト化ス彼ノ職人等怪シミナガラ是ヲ取リ食フニ真ノ鯖也。是ニ依テ在名ヲ鯖之河内ト言フ也」とあります。

これは単なる伝説ではなく、重源上人は実際に木片に鯖と書いて祈祷し、池に投げ込んだ後、用意した鯖を職人たちに食べさせたのでしょう。山中での貴重な栄養源ですから、祈祷した鯖を食べた職人たちは元気百倍して、仕事に励んだことでしょう。大勢の人を賄う為に漁師から大量の塩鯖も調達したでしょう。

同様の伝説は柚野地区でも川で行ったので、鯖川と言う也、とあります。

あれこれと調べていくうちに納得できる事実にたどりつきました。これをきっかけに、史跡や伝説の現地を訪ねてみてある記を始めました。

鯖にはもう一つ「ウナギを食べない」話があります。重源上人とは関係ありません。昔々、一山奥の杉の河内村で大変大きなウナギが取れたが、大きすぎて食べきれないので、近隣の七か村で分けて持ち帰り、みんなに配り食べました。しかし、夜になると村中の家で腹痛を起こす人が続出し、三日後には大ウナギを食べた七か村で疫病が広がり、死亡者が続出しました。鯖村では、大変なことになった、この山の大切な樹木を守る川の主の大ウナギを食べたからだろうということになり、村人は鯖村の鎮守三島神社に集まり、神前に深くお詫びをして、今後はウナギを食べないと強く誓いあい、それ以来、十三年ごとに欠かさず神舞を奉納し、鯖村は、戦後の食糧難時代もウナギは食べず、現在も食べずに延々と守られています。

鯖河内・串（さばこうち・くし）周辺の遺跡

「法光寺阿弥陀堂」《3P参照》
重源が建立した安養寺のながれである。安養寺は地名安養地としても残る大規模な寺院であった。
阿弥陀堂には当時の木材や仏像が残る。中でも阿弥陀如来像と南大門の金剛力士像が同地で採られた木材である分析結果がでている。

「三島神社」《上記参照》
防長風土注進案によると、奈良東大寺再建の際、用材を求めて重源上人が鯖の地に入られた。その際に、大事業成就の守護神として伊豆国三島大明神を移し祀られたという。

「本光寺」
境内には文殊堂があり、大昔は五台山（文殊岳）にあったが、山火事により享徳三年（一四五四）今の地に移された。以前は、徳地の三大縁日（串文殊様、上村薬師様、庄方観音様）の一つとして賑わっていた。また、境内横に最近まで使われていた石風呂も残っている。

「慈眼寺（じげんじ）」
明治三十年に岩国の慈眼寺が現在地に移転され、今日に至っている。本堂の裏に古い石風呂がある。

「米とぎ井戸」
人夫の飯場跡といわれる。上人忌には白く濁るという伝説あり。三谷、串、上村（月輪寺内）にも残っている。

（十一）伝説の色いろ

①御馬（ごもう）の麦畑の雑草封じ

東大寺再建のため杣山から切り出した用材を、運ぶ人手が足りず困っていた重源上人は、麦畑の草取りで多忙な村人に手伝ってもらうよう呼びかけました。御馬の百姓たちは「東大寺様の木材なら、何はさておき、お手伝いしよう」と快く引き受け、25メートルもある巨木を佐波川の下流へ流すことができました。重源上人は奇特な御馬の百姓のお礼に「今後、御馬の百姓には麦畑の草取りは無用に」と、雑草封じの祈祷をしました。それ以来、御馬の麦畑には草が生えなくなったということです。

②横野の虫つかずの大根畑

重源上人は東大寺への用材運搬は農繁期になると人手不足で人集めに困っていましたが、下八坂の横野の百姓は大根畑の虫取りの作業を止めて木材流しに加勢しました。重源上人はその労苦のお礼に、虫封じの祈祷をされたため、その後は横野の大根畑には虫がつかなくなったということです。

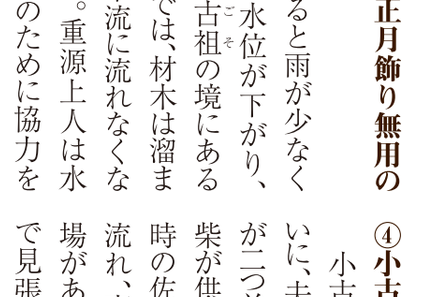
③鉢窪（はちくぼ）の正月飾り無用の伝承

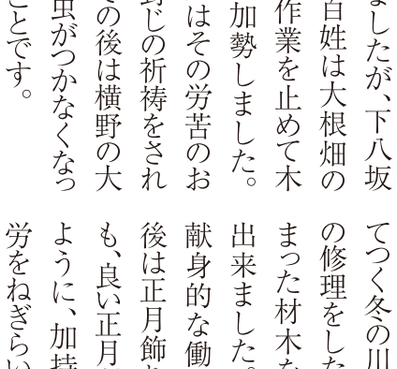
冬になると雨が少なく佐波川の水位が下がり、八坂と小古祖（おごそ）の境にある鉢窪の淵では、材木は溜まる一方で下流に流れなくなりました。重源上人は水路の修理のために協力を呼びかけましたが、正月の支度で誰も集まりませんでした。しかし、川下の一族が自分の仕事をやめて、凍てつく冬の川に入り、水路の修理をしたおかげで、溜まった材木を流すことが出来ました。重源上人は献身的な働きに対し、今後は正月飾りをしなくても、良い正月が迎えられるように、加持祈祷をして労をねぎらいました。

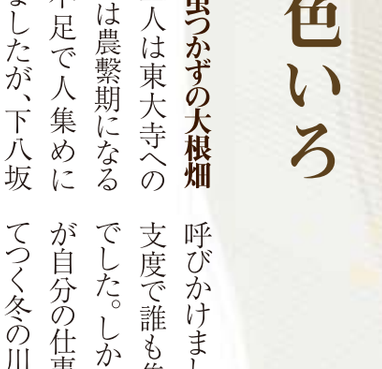
④小古祖の夫婦岩

小古祖の片山の旧道沿いに、夫婦岩という自然石が二つ並んでいて、いつも花柴が供えられています。当時の佐波川はこの辺りを流れ、東大寺用材の貯木場があったようで、番小屋で見張り番をしていた夫婦は、あるとき、前夜からの大雨で川があふれて貯木場に押し寄せたので、流出しそうな大木をつなごうと、流れに足を取られ、あっという間に夫婦とも濁流にのまれてしまったということです。後日、村人たちはこの夫婦を哀れみ、小屋跡に陰陽の石を並べて、ねんごろに二人を供養しました。それ以来、夫婦岩と呼び、現在に至っています。子供の夜尿症に豆腐や油揚を供えて拝むと御利益があると言い伝えられています。

この他にも色々と伝説がありますが、地域の人々が重源上人の事業に少なからず係わっていたことが伺われます。

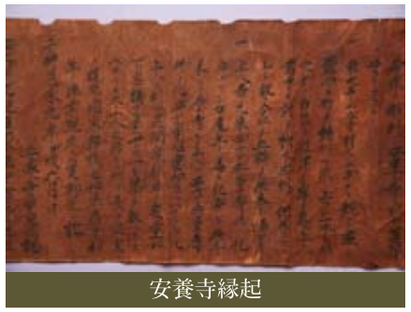

小古祖の夫婦岩





（十二）中谷原（なかたにばら）の馬ノ足跡岩

法光寺に伝わる「安養寺縁起」の後半には上人旧跡之事と題して付記されている中に、「鯖」の伝説に続いて、『鯖河内中谷原山路ニ大石アリ、上人毎日此ノ山路ヲ騎馬ニテ往来シ給フ。騎馬ノ足跡今ニ現在セリ。夫レヨリ木屋ヲ三谷山ニ移シ…』とあります。この『馬ノ足跡岩』の伝説はあまり知られていませんが、「安養寺縁起」にのみ伝承されているようです。


安養寺縁起

私が昭和四十五年に法光寺に住職して間もない頃の初夏のある土曜日、今は故人の鶴岡福雄さんと二人で、中谷原へ馬の足跡岩を探しに行きました。前夜からの雨は午後出かけるころから雲が切れ快適な登山日和になりました。今は鯖河内の奥の石ヶ岳山頂に、NTTのアンテナが設置され舗装した道路ができ、自動車で頂上まで行けますが、当時はまだ鯖集落の一番奥の帆柱から先は谷あいの山道を歩かねばなりません。

縁起に『中谷原山路ニ大石アリ騎馬ノ足跡今に現在セリ』と記されているだけの資料を頼りに、二人は中谷原を目指して鬱蒼（うっそう）と生い茂る杉林の間をぬって細い山路を登って行きましたが、目指す大石がどんな様子で、道中にあるのか、中谷原の中にあるのやら全く見当もつきません。途中で大石を見つけると、もしやこの石ではないかと、一つ一つを確認しながら登り、やっと中谷原にたどり着きました。入口に当たる所に、小さな石柱に中谷原と記した植林の標柱が立っていたので間違いなく中谷原です。

現在は鬱蒼たる森林ですが、当時は植林したばかりで中谷原全体が見渡せて、大小無数の岩が一面に広がっていました。下手から右や左の岩にも馬の足跡らしき痕跡がある石を探しながら、見落としがないよう登って行き、やっと見つけました。地面に畳を敷いたように平らな岩が!!その岩の上を馬が通ったときの足跡の如く、窪み数個が二列についています。私たちはまさに千古の秘宝を探し当てた感動を覚え、すぐに写真を撮りました。ところが、帰宅後に現像に出したのですが、不思議なことに二人ともその写真は写っていませんでした。

八百年もの昔、東大寺再建の巨木を求めて中谷原を通った時、この岩を見つけたのでしょうか。中谷原を登り稜線を北に越えると、石ヶ岳の裾は三谷へと連なりその途中に秀蓮坊跡があります。重源上人が用材採集のため鯖から三谷への杣山の道標なのでしょうか。

愛のふじ橋（三谷）

法光寺阿弥陀堂（串）

※聖岩付近《9P参照》